

地

二四九



木曾路名所圖會  
一坤

915.5  
327  
Vol. 2



老オノ菰モ杜ト

奥ウラ石イシ神カミ社ヤ





蒲生野 武佐より吉里をりし西生木城

給送

老の北行

蒲生野武佐のときまふ位勢乃中と云六君が所代の敷あり  
仍書ぬれと武佐でし火いふ山吉れありに泊せぬゆり  
とるの何より好風おとけ中しに身一とて都城より  
おとれぬ地吉杖ふらに陣の夢あつてまの中しに身とれ  
の遺言寺はほりわら草れなき露人きかや阿あ人  
に表がわ仍十信と依土橋のやせひはけられんやと  
物づれ

都出さつてくえあわを青ふかしてきひぬとる杖凡  
けしや出物くむさる飛のあうちとを程と老曾の敷と  
おひりあつて下草ゆきおつたれおふりりまをけるく  
月ひをさる  
おひり家よりおひよと書も名りおひそのりりれ下草

本考二州五

老藤杜

西生木のひりし老藤杜 刺老藤の二ヶ村あり  
南老藤と樹道のむにあり

後拾

東流杜ゆいゆせ人附るおひその東の萩中れ一妻

土江公資

新勅

かこくた家身附るゆ果ぬ老若れ杜の庭を思て

保素院

横拾

よ中れと老若の杜ふゆる若れ穂る年と才志了れつ

廣人志茂

新撰撰

とわへて程れ物ぬれとて家身老若の歳乃志免繩

赤井春

後十

我身と老若の杜乃風木本のまかり程を思てこ非

高天納云

新千

いそめそかと妻よの志喜をへる老若れ歳の若れ志

石炭

新撰撰

附しゆと六魚成を子介女十ありあつて老若の杜乃お志

高天納云

真石神社

老若の両村小あり 追喜式内々

祭神 天津恩屋根命

相殿 小飯坊の神と刻るは里の生垣樹と  
例年三月和申日

少貴神社

老若の一方十六間 洋あり

祭神 少彦名命

仁徳天皇 宇多天皇  
數寧親王を禊也祭る



此致... 遠景山總見寺... 遠景山總見寺... 遠景山總見寺... 遠景山總見寺...

尚社を... 尚社を... 尚社を... 尚社を... 尚社を...

十六人の... 十六人の... 十六人の... 十六人の... 十六人の...

官入道... 官入道... 官入道... 官入道... 官入道...

南を... 南を... 南を... 南を... 南を...

連絡... 連絡... 連絡... 連絡... 連絡...

屋形... 屋形... 屋形... 屋形... 屋形...

淨巖院... 淨巖院... 淨巖院... 淨巖院... 淨巖院...

奉尊阿... 奉尊阿... 奉尊阿... 奉尊阿... 奉尊阿...

開山... 開山... 開山... 開山... 開山...

又... 又... 又... 又... 又...

遠景山... 遠景山... 遠景山... 遠景山... 遠景山...

本尊十一... 本尊十一... 本尊十一... 本尊十一... 本尊十一...



陽一樹々を採窟水迫くよりて老く更し事一月八朔と既

てむらにらるすしぞとらんる

安土山古城

關原公の遺墓あり今ふ城中の石塔あり

信長記

正二位大納言兼右大臣將平朝臣信長公進は國安土山を城都小旗可

有御移して奉納せし惟住の即左衛門尉長秀と可は是なる天正

丙子正月下旬被作出し長秀久松の栢園抽籠を奉り日十七日小

安土山より去りて雲霧不可入具是或は極治表匠然も石集ありい

石と取べき山持運て入る兒通路活沃とも云は祖崖とも云はるる

走らるる秋と日小修ぐ意多二月廿三日小信長公安土山被移御座

移方と勅と幸神ゆりりて周光筆流弄は駿馬二匹長秀小下され

名を依進智外孫馬廻以下の屋浦刺ありは其山も慶元小上山下も

更中堂地はらりりて四月初より廿九石塔の石を引せらるる小大石を引よる

幸日小水塔月小東よりり何共御下知ちありりはれは我あり

...

本朝...

寛文石を幸ひよる幸巨靈抜山鳥嶺上千鉤小長しは六年以終せり  
其功已小成以都て信長公と幼より弓矢に推めて仁義道德の事以て  
勢好子ども自れ小私心なく理小暇く抄りて其功の益進む幸恰め春  
氣發生貴罰正しく邪正以辨ゆ小幸生知くも申以て了く然小方す  
慶明より少小人の思ひはれも幸自西自東自北自南思つて服は

...

安土殿守天正四年七月より普清仰付所

普清奉行

本村次郎左衛門

上一重之金具

後藤平正郎殿之

二重目より

赤沼對阿珠金具

片丈五棟殿

岡部又左衛門

小細五所丈五

雲為遊左衛門

漆師

苗 刑部







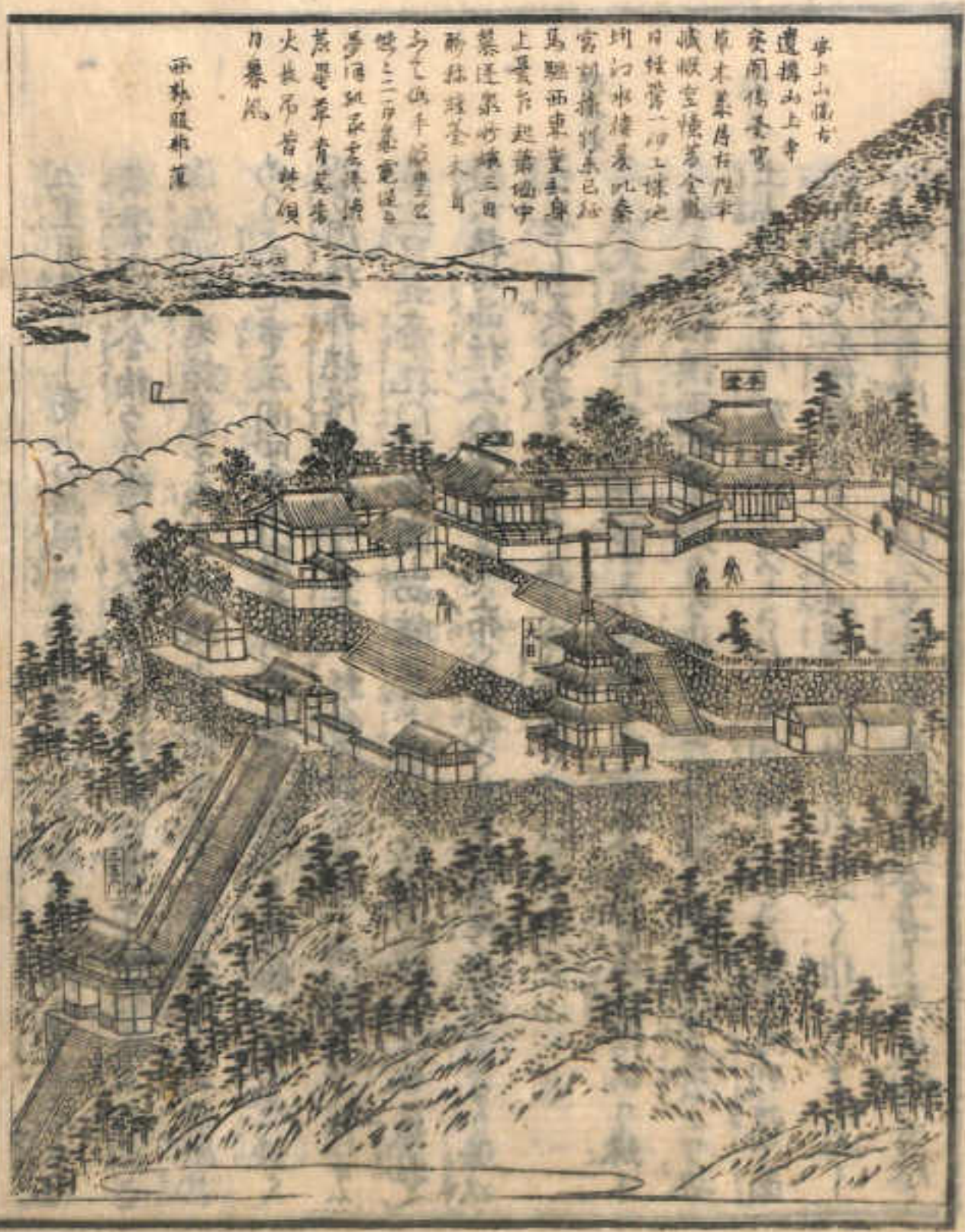
安土山 總見寺



本居一休

安土山 遺構山上寺  
 交關傷聖宮  
 草木榮茂在性平  
 減服空懷若全龍  
 日性管一切上棟地  
 州河水接景以奈  
 宮湖掠竹木已極  
 馬馳西東望玉身  
 上曼乍起落地中  
 禁逐泉妙煉三日  
 粉絲控登天耳  
 亦乞似手願生也  
 時一二乃集寬遠也  
 夢酒似取忘其清  
 蔗粳草青楚香  
 火長布皆焚傾  
 日暮風

西林照非蓮





九重因縁あり、南山の破風は小西寺に此序あり、内外ともに色柱  
朱塗、内柱金箔あり、繪を敷き成道法法の圖十六大弟子、各圖を  
清極、例、鐵鬼諸鬼を画し、端板に飛龍、以、画し、高棟、葱實、珠、彫、物  
あり、上の七重、三間、四方、清極、内、也、金、泥、あり、外、輪、も、亦、金、泥、あり  
四方、内、柱、昇、龍、降、龍、天井、小、天人、彩、白、の、跡、と、畫し、清極、内、也、  
後、三、皇、立、帝、孔、門、十、哲、南、山、四、皓、晋、七、賢、坐、臥、画、に、狭、間、の、戸、織、物、之  
敷、六、格、好、品、柱、み、形、黒、漆、也、布、と、着、く、其、上、堅、地、小、黒、塗、あり、漆、以  
唇、卷、し、瓦、以、お、さ、せ、り、其、以、の、壯、觀、也、

信長記

其頃天龍寺に妙智院兼長和寺とて碩学多才の活佛あり、殊に  
大明春、信和、漢、兩朝の達人あり、由、奉、世、の、あり、多、れ、信、長、公、の、安  
土、山、の、記、を、清、不、望、あり、多、し、これ、も、因、縁、あり、此、事、深、列、波、下、南  
化、和、尚、と、て、名、儒、也、り、ま、は、則、此、佛、小、修、付、れ、甚、く、信、人、と、も、な、れ、り  
六、板、く、其、有、清、從、あり、け、ん、も、亦、兼、長、和、寺、へ、令、せ、り、是、宜、あり、此、序、を

手巻ノ四十一

至小辨、合、し、り、ひ、も、合、友、居、られ、辨、を、も、不、り、り、して、別、名、を、を  
傳、れ、り、其、記、あり、

總見寺圓通閣小揚ふく

古曰太山之前難為山、大海之前難為水、日域六  
十六州之一州、曰江、江左有山名曰安土、其山不  
在高、其名高大山也、盖夫非山之獨得名、有寬仁  
大度、人居焉也、劉夢得不豈曰乎、山不在高、有仙  
則名、水不在深、有龍則靈、夢得之一言、可并按焉  
層巒之崎嶇乎、上者自然、金城也、滄波之渺茫乎  
下者自然、湯池也、自天地開、以往、雖有此山、一人  
無識者、矣、葛原帝王的、的、令、孫、平、清、盛、其、一、代、之  
華、曹、前、右、府、君、者、禁、庭、綱、紀、武、門、棟、梁、而、實、天、縱  
聖、武、也、先是、天、正、四、年、之、春、一、見、此、山、便、識、萬、古、



城地開闢洪基權輿于此矣力士星馳揚石巧匠  
霧列運斤則不終三年而其功大成矣潛慮夫數  
百丈之石壁十萬間之大廈何翅力士之力巧匠  
之巧乎唯流出府君之一胸襟而已目機之所明  
意匠之所巧離婁之明公輸子之巧不可跂而及  
者也峻宇高堂之凌碧虛者也極夜摩都吏之壯  
麗兮直欄橫檻之聳翠崖者也盡秦樓魏闕之華  
美兮布地硬礮者柔露內潤葺屋瓦甍者帶霜外  
光而湖月之上玉階者供府君之夜遊也南浦雲之  
飛畫棟者催府君之朝吟也颯颯松風之動金鈴  
聲呼萬歲山耶紛紛白雪之映珠簾影含千秋窻  
耶權門貴戶之圍山戢然也遠水鱗華也盡是無  
不丹漆黝堊寶塔之突兀出林間者疑繪遠寺鈞

狂之人、浮蓋邊者怪圖歸帆滿湘十里風景嘉  
陵三百里山水不可同日語焉英雄豪傑之擁纒  
鞍出入于相府貴介公子之纏綿袖往還于官途  
爭紅花紅葉色也億兆民之富驕者鐘鳴鼎食之  
家也見者反目駭汗聞者拍手賞嘆矣江北白鷗  
懷惠占開江南梅花被化含咲信及豚魚咸知草  
木當此時市人歌于市野老扞于野行者避路耕  
者避畔雖堯舜民文武民不可讓焉如旃起王道  
之衰修神社佛閣之破續斷橋平峻路是故四夷  
獻貢來復焉八蠻解解服膺焉或臂後鷹乞臣手  
其幕下或上良馬請將乎其麾下吁策勳偉矣哉  
鳳凰現瑞麒麟呈祥者非今時何時乎祝望祝望  
向所謂太山之前難為山天下人亦將曰安土山



之前難為山野納雖逢街叢州橋散陋安管見此  
 名山豈無感慨乎卒綴早詞於八韻述盛舉之萬  
 乙

伏乞 咲覽

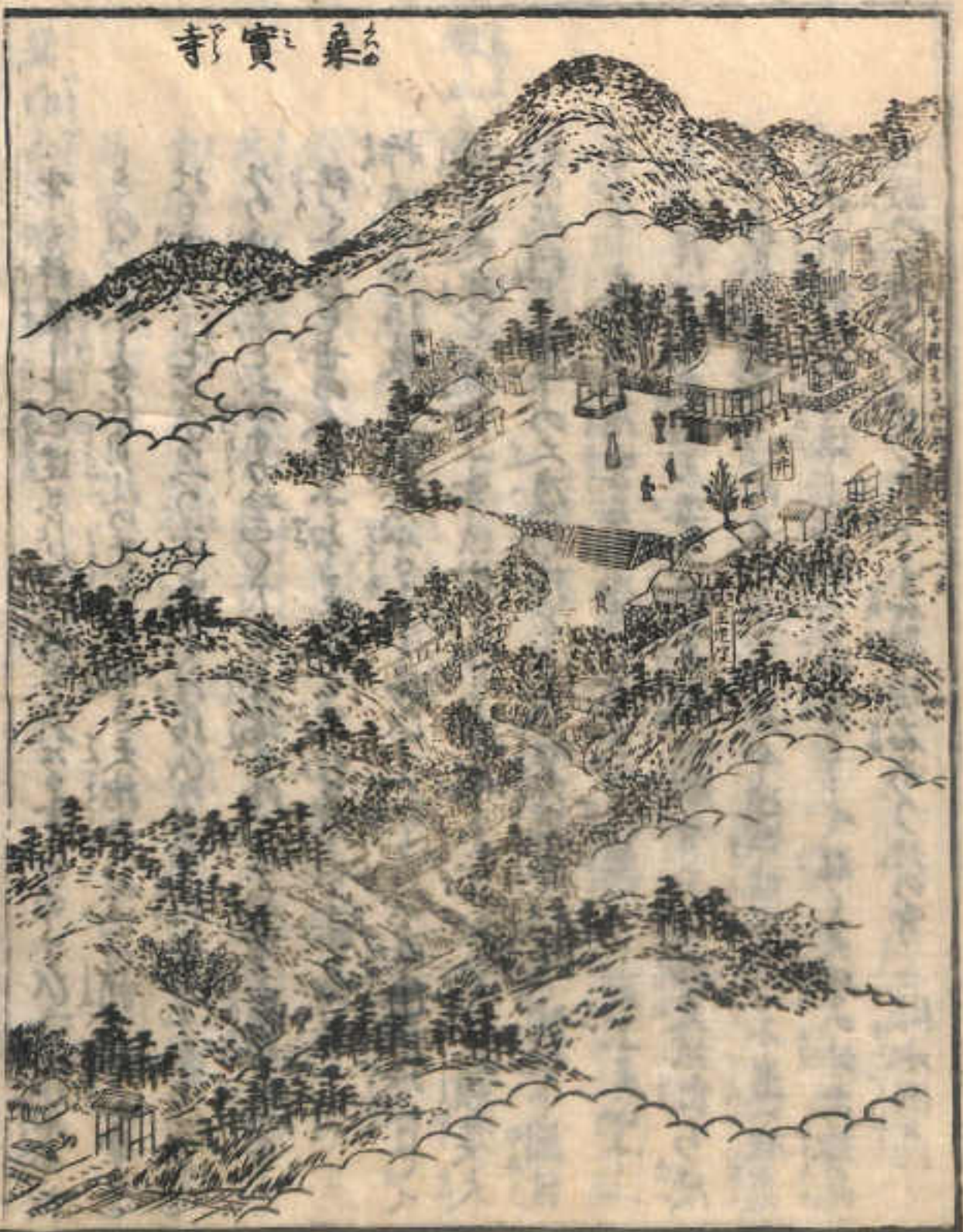
六十扶桑第一山 老松積翠白雲閑  
 宮高大似阿房殿 城嶮固於函谷關  
 若不唐虞治天下 必應梵釋出人間  
 蓬萊三萬里仙境 留與寬仁永保顏

岐下沙門玄興拜稿

信長記云

信長公濟言色不意トクハ南化和尚へ黄金百兩小社三尊符咒又  
 必希濟使トクテ其芳功と對言ト馬又兼長和尚の深徳甚濟感有テ  
 金子百兩銀子百兩小社三尊二位法衣濟使トクテ恩賜トクハ多  
 御上深徳却て先トクハ六箇攝の幸成ヤ中御見トクハ人の素性トクハ何

新實集





幸も拜禱して已達せんと達せられざる幸ありて之を金匠主事以  
そのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と  
おもひてそのくまを自ら自然の天をば開き天龍寺破壊の初に神人幸と

東山通古城

一七 秋のゆきを信て所沖より行生信をまき信をまき信をまき  
比良嶽比殿の高根の意の幸ひり長等の小列を遠く眺み眺み眺み  
あじの炭をまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
風をまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
みはははははははははははははははははははははははははははは  
あはははははははははははははははははははははははははははは  
本尊 薬師佛 十二神将 胎光  
當山は古寺ありてひり白鳳六年幸尊湖水より出現あり  
其後元明帝の所守藤足公の息定惠和尚崩去り居たり  
素寧と号するありては龍洞を住を教のひ南山に建堂あり  
築山古城 東山通古城より二里あり



は... 小坂用清... 子息... 誓義... 家老の者... 信長

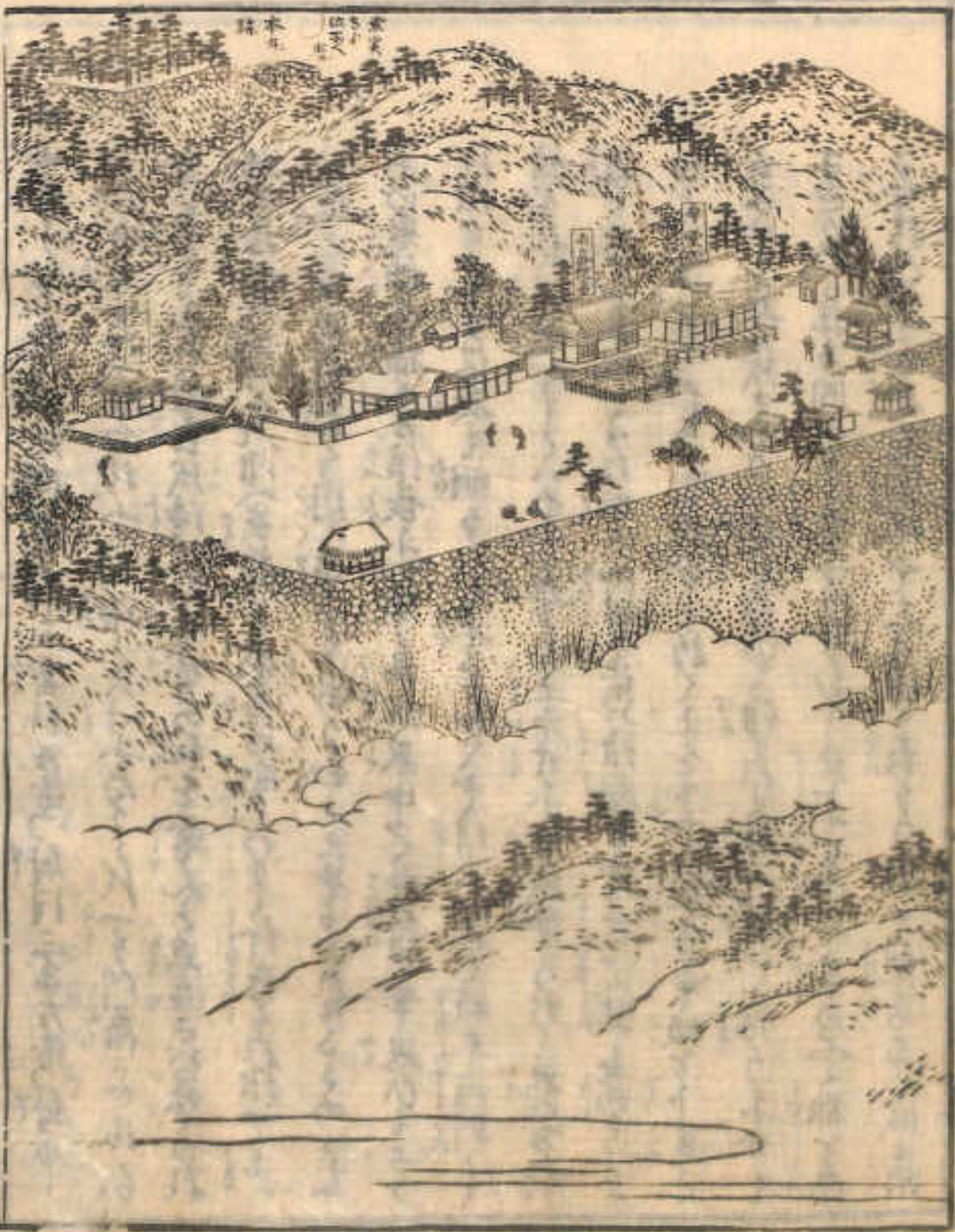
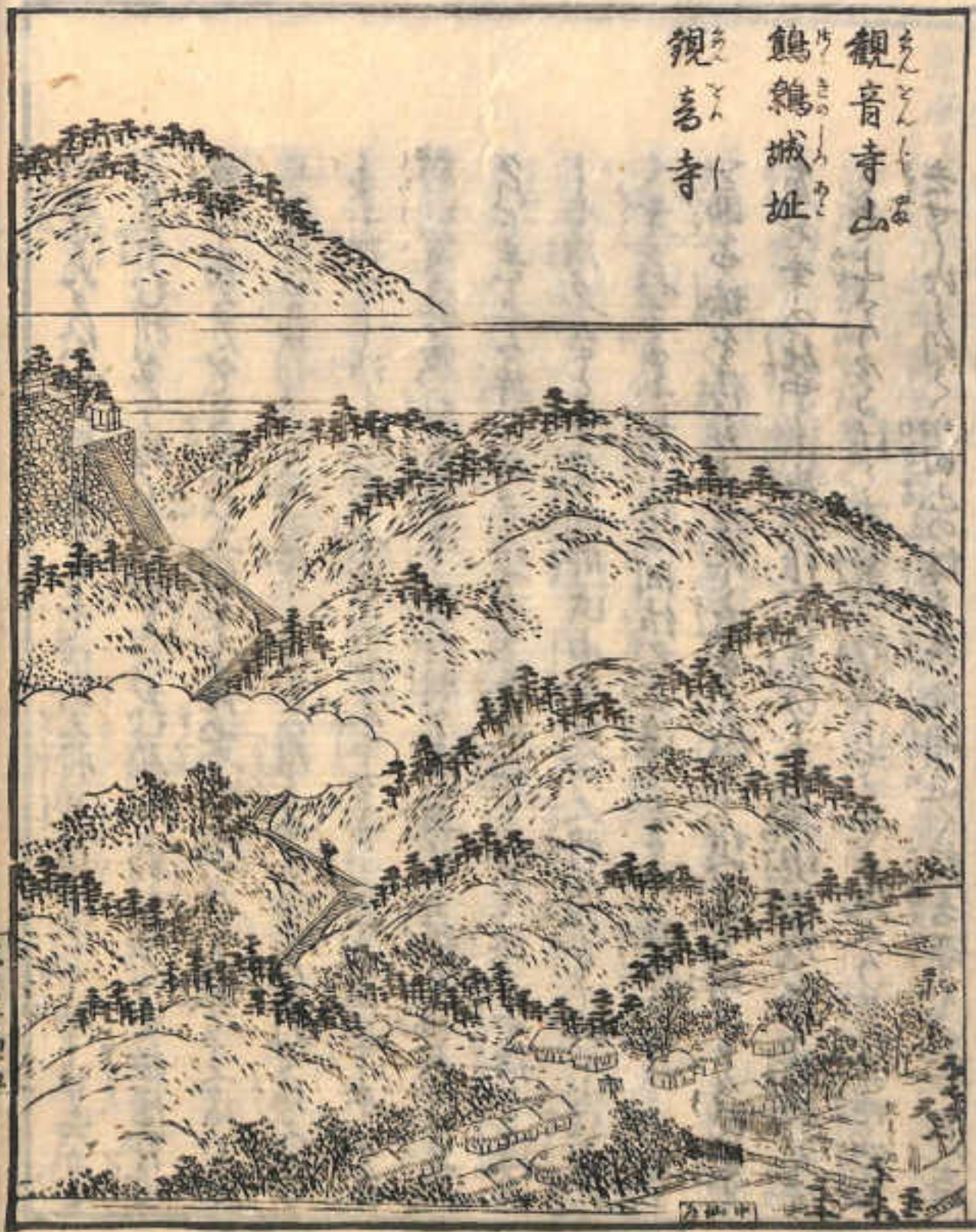
○園本意向せは定く海通船の城を先攻めし御は留山の城は以後  
の事宛しと申す相争りしは幸ひやして有難くも幸小あつる兵  
松をう勝つ松屋一信長は南島の結圖をまねりて之に海通  
の難易考ねしひふ秋の係別をも懸入を属ぐしと申すせしむ一六  
親吉寺和山へ押寄する様ありて和山より大志原之元と押して  
差るらん和山よりい興るる無難の方勢と押廻し給ひ給ふ本按本  
相遠しとせ見入るる佐久右衛門尉本下藤吉丹羽立高左衛門尉  
浅井新八と兼て無難の責も小定とれる事うれしを關を焼くけく攻  
寄り不城の内もと吉田の河某建地源八右と松屋と六中入敷と  
下し一交さる人せしけし不徳と弱くや今我と人殺をう寄せ思  
城も終に叫び喚んぞ攻め同叶けり城守一引とんと走けり進儀  
山のまありく早登と無難も或る誇許討た勇ふしとる事うれし

信長の御

け勢とぬる家おのれや者とも申す人の大將言は様と下部しは是なりと  
より申す所より相争りくもたぬむ居たりねむさくも海通舟で  
藤原の物る人せし殺入打入面もや居入んとしをれを放りてくや  
思ひ及ふ無難却りて其不徳もまゝに推し中人もいれを佐久間が  
多小興せし佐久間之六原田與助本下も小興せし竹中半平も傷  
將領實差爲の尉本村隼人正丹羽も小興せし林忠信も助く善  
かねと是と申す持と持と推し一合無難もいれを推しと申すは不  
しと申す之きと申す間即は由を己人の大將人信をく多小信長は  
も幸うれし多小あつて多小同佐久右進もあつて陣中の者とも一合  
と助多味を信たや居たりねむさくも海通舟で藤原の物る人せし殺  
角毛幸の健平も小斗ひ仕と室ひ一勇無難も信たや居たりねむさくも  
と幸よとるる信も本業よお返しとてをれ見入るるれ無難も海通  
せせしめりく和山の城も其後同退く親吉寺も鬼やせん角



観音寺山  
鶴鷄城址  
観音寺





やあしんせしやめは種とる小三雲新を徳の尉日二高左衛門尉申  
身と金うしく時長が侍に及今替の恥を雪んと思台は疾く見  
等が居城へ逃せられ城へ去りて家老の面くつて計存られ作せ声  
孤放と申すれ各も内へ退くありむと志せられたるものな  
あの鬼神の操る信長小早う小成果中く敵討中幸思ひもうち  
は惟そうせば我も明らんも早そくせ日向れを殺幸信明  
所る其解彼とくいあんれども上下小令城助うたけ思入る兵  
自ら執念と切くつわ何の御曹多は誰圍中殺る丈其は何と  
ねとく評して君臣上下此分を移く上を上と親考寺坂と下を  
女子共と聲次あり小悲とあひて誰れと噂ふ聲くゆり小分も  
ささうねれお同傳と書さるるり小宅小一平平家のく都を落  
させ給ひ一分此と角やせとれと書さるる形て親考寺の城を落

去りて兵利と小梅孫一謀共一日二日の内小十八箇節を兩退  
其外味方お侍の事とは人頭を取其内小己が希味小玉せ侍も有  
退散したる城と小宗徒のく入置れたり押進は國中の城と將茶  
倒のてくは置とせ落去りたる幸は信長卿の一物疎りり却る  
智謀もるぞ和留しるんとよ政おりゆつれさ兵隊は多くさひる  
筒袖よてふりすりれり兼て敵の謀謀よく聞らるるもさる角  
とちさうりなれ味方謀畧の意さる幸奉てやさんといふ幸と成  
井が家老小吉尾英化中たりは兵侍の人さくさく智謀の味さ  
幸とるねんや僕の高祖の天下成保しと居さる少の張長あつて謀成  
惟幕の内小むと王若此作せ成し幸も有り今味方の侍小本  
下秀吉あつて深慮孤外小あつたは幸お僕等しは候きとる  
小松寺 其地山の尾續さ小平坂といふ所  
瓦屋寺 小松寺の尾續さ小平坂といふ所

小松寺  
瓦屋寺



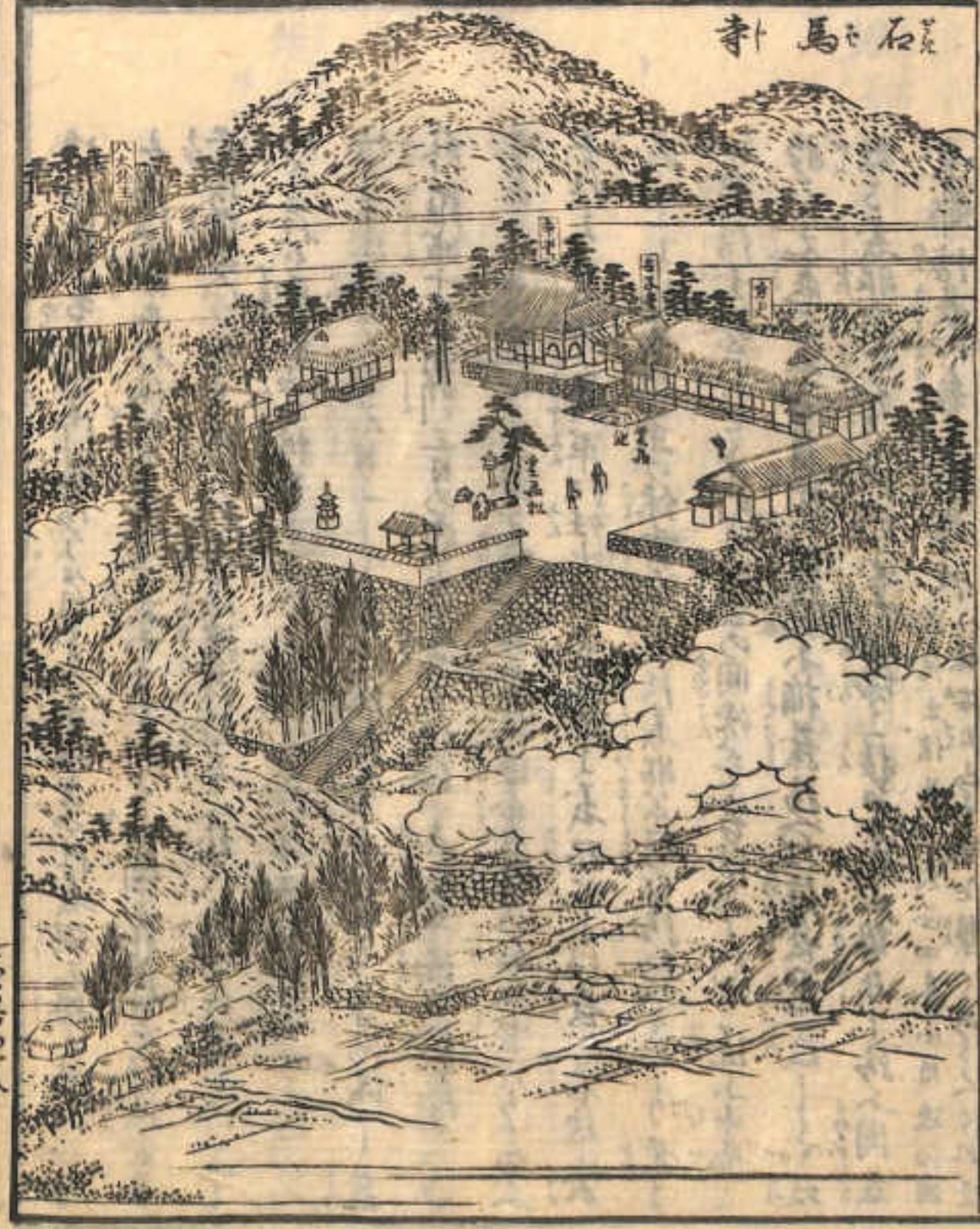




越之獄地



石馬新寺





地獄越

観して... 安土山より石馬川まで

此坂路甚険... 道小逃... 根小蹶... 比取山比良の高根...

それより... 地獄越

とれるわ乃本葉...

織山石馬禪寺

神... 石馬村の上...

巻首

大正十一年

高宮の歌... 高宮流





本尊 弥勒佛 惠心僧都の地

南無佛太子菩薩 沖自得

四天王大像 鳥佛作地

十一面觀世音 右目地

地藏尊 運慶地

閻魔王 小地堂地

其外竹竇は朱夜の釈迦佛を唐思恭の等不動尊の弘法大師

の等弥勒二尊の惠心は等跡見不動明王を元三大師の書をもふ

後行者の惠教を冲自得形

八大龍王社 山頂小あり 當山御守とん一とせ旱のとき農

多と名共財冲神地あり

柳苗は推古帝沖浄寧靈鍾を北二案の冲時御駒小見園内

巡視ありて此處靈地ありとて徽と名ふに其五箇もの一あり

十一面觀音 太子沖地

西方大威德明王 上沖地

方大本尊千手觀音 安河地

北方多門天 上と目地

後行者 沖自得

又良馬もけ里ふと向う終不覺く石もなる故不寺の跡と其石  
馬今寺の齋農農家の形あり年歴千歳なるび運札の附大荒菫  
せ以迄年雲居禪降ふ未ありとむりは喜はは再言あり則堂  
前上棟ふん公雲居松とふ此禪降を正保の頃乃人ふて後まの院  
紫衣と賜ふとせ圓へ

愛和川 名寄 高宮中七式里八町け宿と愛葉の名存ありて能水邊ふ

形り流を一溪葉とふ

高宮中七式里八町け宿と愛葉の名存ありて能水邊ふ

形り流を一溪葉とふ

け駐候まくと橋村ありけ道とみね布信と織られ高宮文徳と

りよた是橋を過くと千枝村ありとふ四十九院村とふありとの

由流候ありとふ本流吉流の寺あり

四十九院唯念寺 四十九院村あり能 軒山と野に 辛流吉未寺葉風



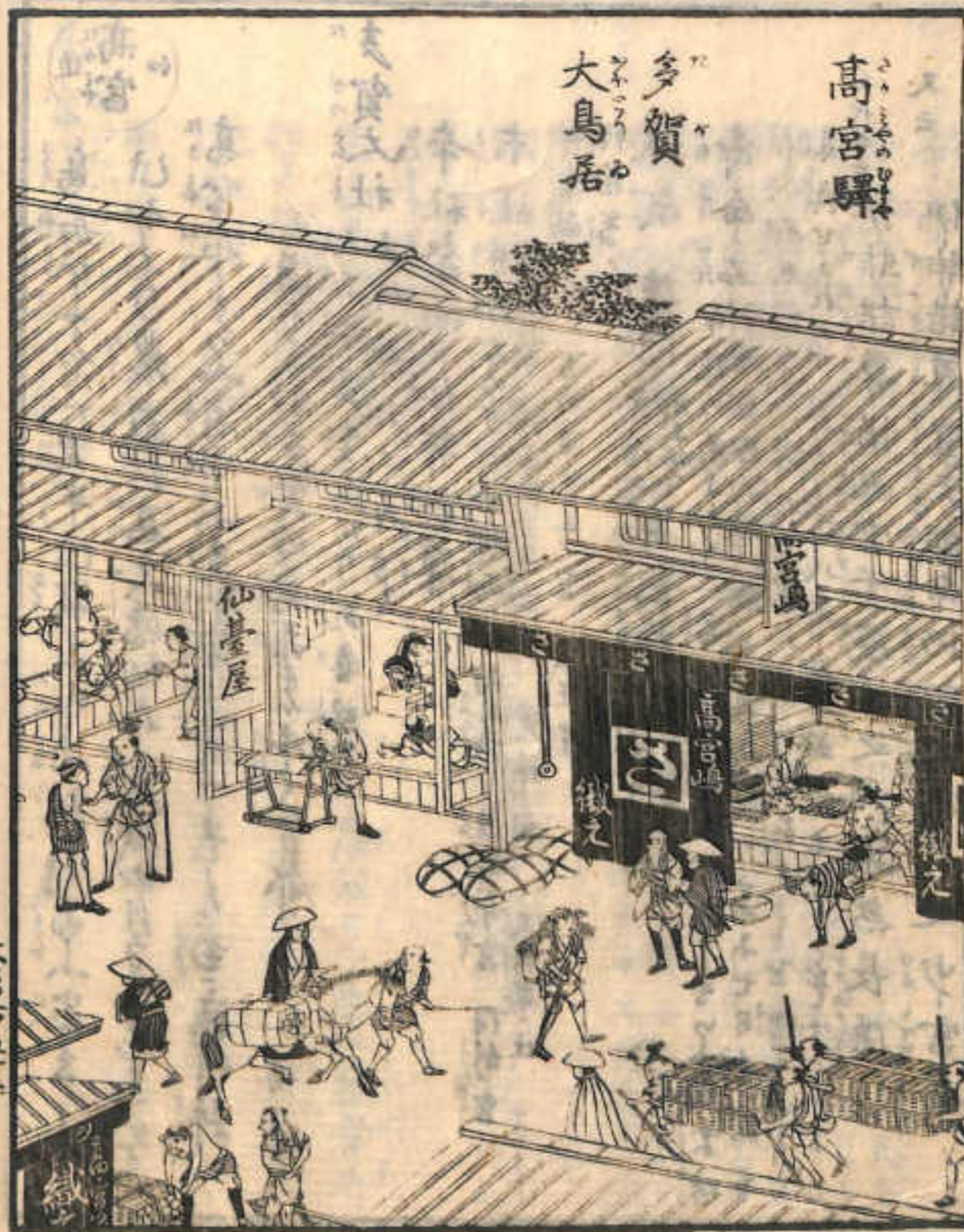






高宮驛

多賀  
大鳥居



高宮驛



大鳥居



古事紀云  
神書鈔云

伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也  
日之少宮者近江國犬上郡多賀大明神是也  
近江在良方日之所初出也故曰日之少宮出  
雲杵築宮在乾方故曰日之所入也

夫當社之天照太神乃多々ちかの神神也神也神也伊勢系  
宮の奪道を相くあふ多く訪くる打り例案を卯月二年の日  
く神城おんくと遠近のく高宮の町小群集して猶ひくも  
け神神乃威徳形及く別處と不動院とて神領三百竊石社地度  
してある所と芝居向う相撲あつて世々より懸ひいそんはほし河川を  
け園の丈たろりとせきまきり  
多賀とて因就を清くひく一里まをわき歩んば名りく  
不知哉川の隈ふゆふ  
不知哉川 大坂村の東ふあり  
名大坂川ともいふ

古今

あふれこのふらふ川にさくまよ我名のはな

續千

いああふあふれんくろあふれぬめふたふふと  
さや川今や氷もあぬ乃くこの山風きく吹りし

平時光

鳥籠山 この山名  
いさや川の上下あり

あふらふあふれの枕ふゆへんく鶴くるくくこれ山風

後念文

丈木

けいあふれらその末れ犬とやナ川ふ鶴くるこの山風

為禎

日

鳴麻とみひうゆりとくこれ山風の枕小聲送ふく

後成

石清水八幡宮 又此村御所の左ふあり  
麻生進幸に戸森田氏建ふ

けきりりき根味下へ知る道あり又右のふ小多賀より街々  
ゆる道あり東園より糸流の道く小野村道の右れよふ石佛

地蔵寺あり小町塚とらふ

小町塚 小野村とらふ  
名村とらふ

表らり我身の果やあふ縁はあふちの霞とふり

小町







夫木

ひらひらやう雲死門とやうに八重塔を井小達ひらき

信信

日

よと懸す衣指のふれ物日長くと晴しく去り去り

年乳母

ふく松原

外と松原村といふ

後古

言ふより世あはれ松原ちたり垂死年久と君之方代

人唐の  
必長

磯寄社

松原村を過ぐ磯寄二十町洋のりは

系神日本武尊

磯村の生去神といふ例記四月八日

そのくぬふるれと坂喰くくそ社中ま六磯崎村あり又湖の

磯意坂津さひくして一里をうりまれば汀小石の鳥居あり是

を人小まはなあり抄上筑摩北原一海とらふ右の方一丈町

むろり入まは社あり

筑摩社

筑摩村のありあり

祭神市杵嶋姫命

拜殿本社の

若宮祠

社社のありあり

浄釜竈

八洲本社の

ありあり

鳥居本

神教丸店

えんがわれ

あふのふく

とくあも

あふ

あふ

あふ

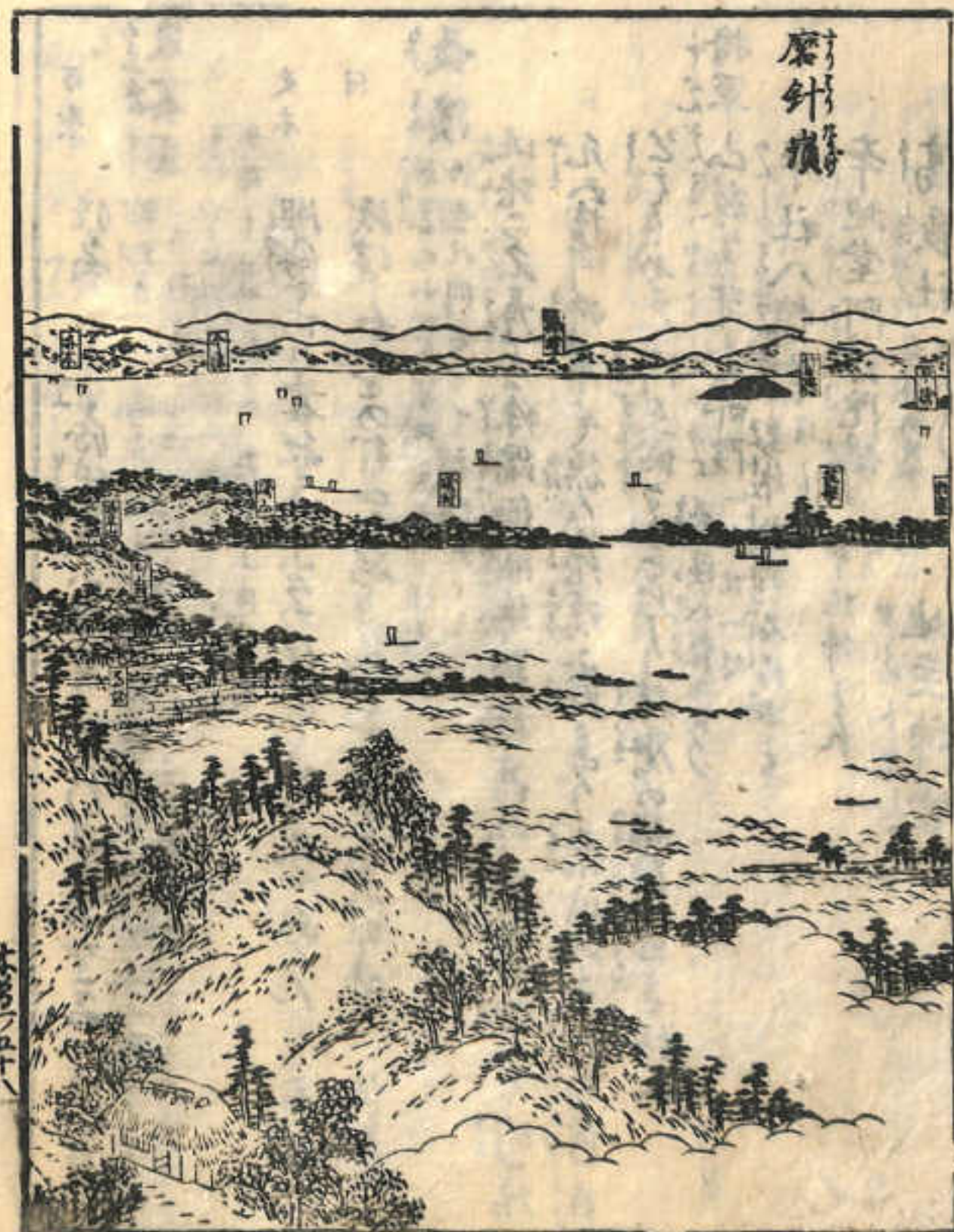
あふ











針葉

本巻一五十八



熊野三所祠 あふり

稲荷祠 上と日下あり

薬師堂 日下あり

地藏堂 上と日下あり

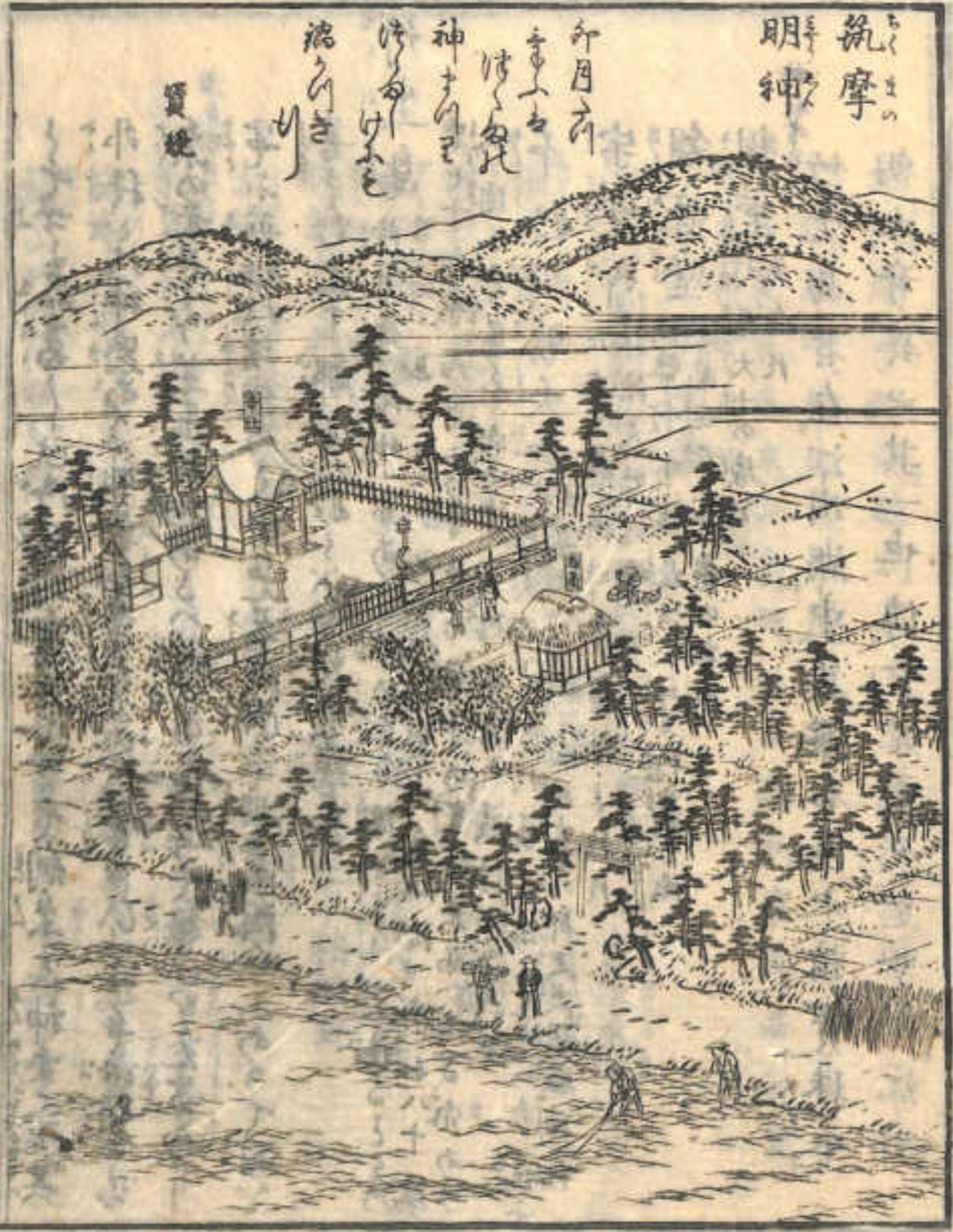
護摩堂 日下あり

當社と初是八幡を即義家公東夷征伐の時こふ勅造りしころ  
 厚く崇崇ありて社殿三千石寄附し給へ其後後三徳院勅造り  
 せし給ひ勅使中向ありせられ放生舎と稱りせし給ふ里ありし  
 天正の代信長の代大いふ廢し秀吉公御在城の時再營あり社殿  
 百七棟石喜持し給ふ坊中妙覚院の庭中の曾呂判新造造りし  
 初之儀諸地焼石恩育紅梅等こころに庭あり汲月臺の觀臺  
 春源の寺之例案と九月十五日ありて奉山十二所とより本社  
 出でて三所を締り其山の所よりワラ及不風流の相云成を  
 山のよりきき給へむ至りて杜記ありこれを記して遠近よりこ  
 ろく二三夜を泊り群集する半稻麻のやき名あり地長濱也

末巻五十九

筑摩 明神

所月あり  
まふら  
はら  
神あり  
はら  
はら



寶鏡



とて學ぶ名爲しは津波川の方ふありて例案と神室之刀其  
外持と此神室あり神樂を考むる代替ひしは世訓あり  
衆の衆日より芝居観物ありて拍子の手ありて演ひし人方あり  
室小英雄此後傑のそく先至はひし其遺風今ふありて目と  
喜むる幸都ありてひるに奇観也

竹生島

依井郡湖中島ありて島の身は龍と云ひて後とて島  
東七十五尋西百十尋東の岩下の岩木東西一連の穴あり  
通ふと云ふ穴の中は龍の身ありて長は六尺六寸五分

本社

辨賊天女天降天始と号れ長生保七寸二分

宇賀神

左右二神門中宇賀神と称れ

親音堂

四尊千手像長六尺二寸行基の地

祖堂

新基大士の像と

竹生島者在江州湖中其巖石多水精寶珠本  
朝立奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州

神社考云

本考(六十)

地折湖水始湛駿州富士山忽出焉景行天皇

十年湖中竹生島初涌出云

昔行基菩薩來此島時神女現形連基基初建

竹生島什寶

小枝笛 鼓筒 蘇州持 脇指 神慶所持 吉次太刀

依藤太太刀 天狗爪 馬角 二股竹

傳教大師最勝王經 弘法大師船板名跡

玄上琵琶撥 松室童子琵琶 七ナシカワノ毛

依藤太十種内露硯 仁和寺覺寬僧正水精數珠

土俵布袋 弘法大師作 矢嶋御所代々系譜

松室の仲兼小法師一童ありて後小竹生島小法師一日童子本

毎年三月十八日小竹生島小法師神仙會ありて此を其後あり

頼久の陣の琵琶伝人仲兼小法師琵琶を与小竹生島も此水に

風通傳云云



はら一夜仲あふの舟仲年経に

心神は遠す

神の心は海のゆきまふくを頼む神の心は海

二月十八日行生橋小松とほろくを井とるの小島樂生も須史あつく

春して松の内小松とるの所う身まきさたあきあふ一院院く

仲兼と仲瓜抱き款息止尺則は花苞瓜と小納く仲兼も後小

其面離り登りて其終ふあなをて尺 教書出

平経はけはる小指て神助法樂の物小一曲を強くとて松を託包とら出

形人やや定い安兒幸之とて寺信即花苞と抱く興ふも神政のき

よせ終ひて樂ニツニツ謡く後弦上石上とらふ秘曲は謡く終小神

約交やとてさひひむ社檀より白狐ゆく遊びる社不思議なれ終

正院院以開く神明の化理とあふ下けのく思ひ所願成就疑ありと

てうまうさふ

末巻六十一

朝妻に

ひげの  
野の  
うた  
のて  
おそ  
ま

あられ  
あま  
あま  
あま

あま  
あま  
あま



あまの  
あまの  
あまの  
あまの



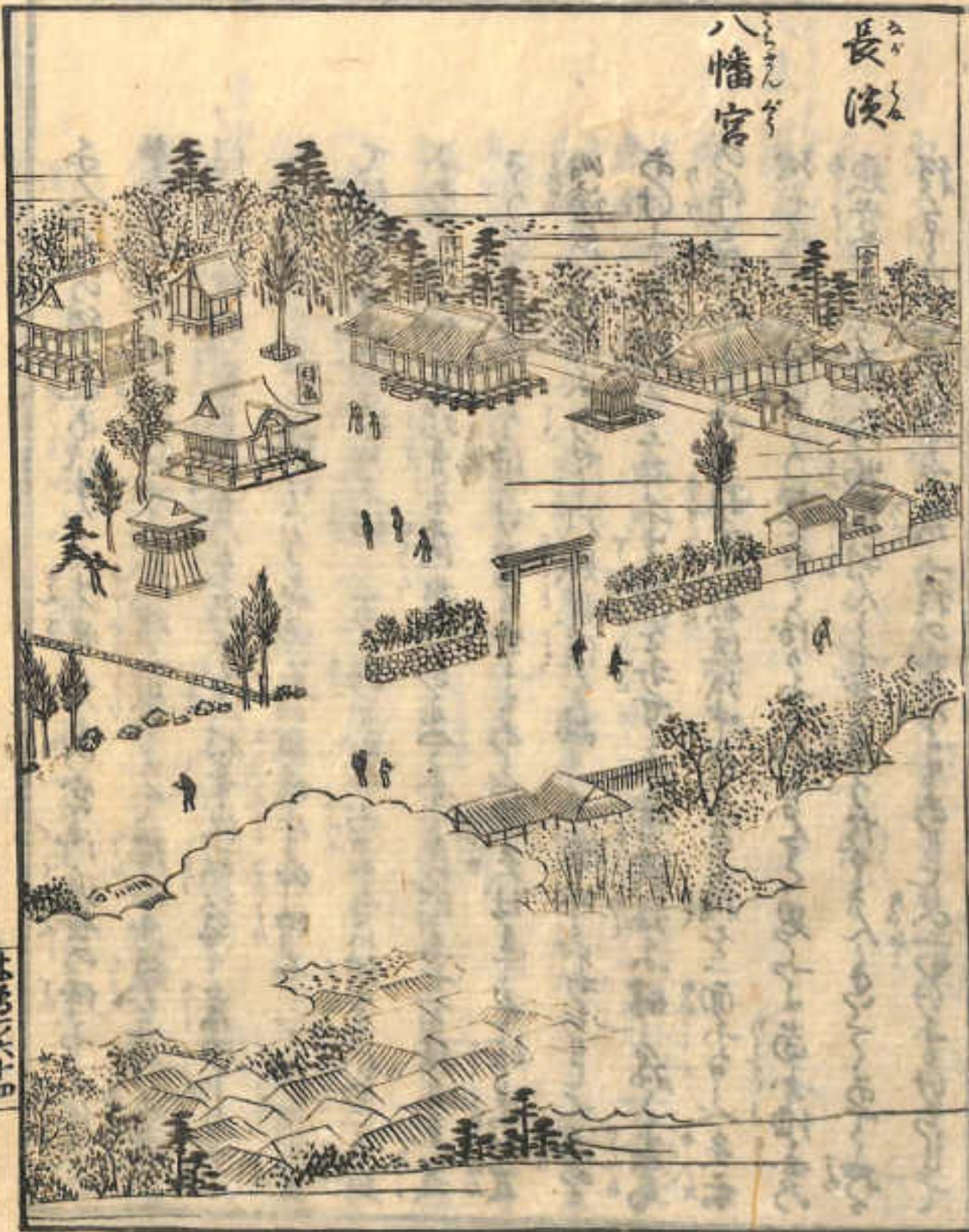




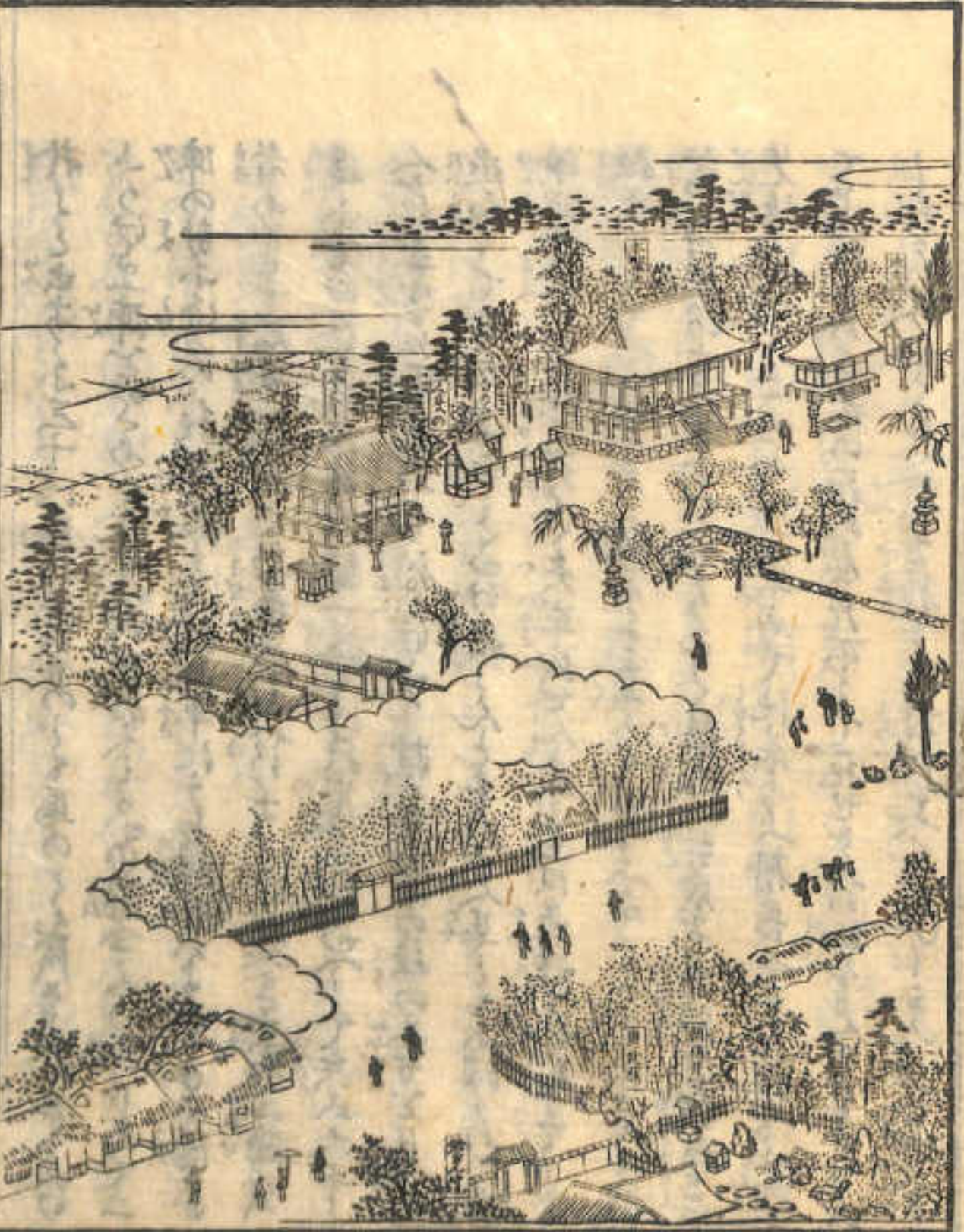




長湫  
八幡宮



本考二六十四





捨てしむるに二十の馬のほかに馬のやうに成るるまでせしむ  
 ころける一陣とてころける陣は六百餘人たるの處にころのよもして二  
 陣の勢小迫るれ其時若し一陣の軍にうら勝今なをとも小勝  
 者ありしやん安くさひて勢のしるけちふくもさまの山崎成  
 通小見のじしは陣乃旗一流しは處よりあつて兵六千  
 人が程要害にありてつりける糟谷二陣の敵の勢と見く  
 追面してせむらるる重くつけ陣とてまらぬ人馬ともふばれて故  
 陣廻小交う相道行く矢軍がせんとなは矢持る射して  
 敵そくなくれた勢るる鬼もも角もつるふだくともせんぞりたは  
 驚くは光の方をふみふたりあくはほの勢がぞお結る越後宮  
 先陣小軍めつと陣と馬と早めて馳本の大糟谷二陣越後宮小  
 て中隊をち矢取の死ぬぬたあて死せぬれぬをえつとやるふ  
 したる理をくは我軍がぞつて討死をくつりつとあが一日の命

公勝もそれまで成るまであつて今言ひつるは回使世人のいふ  
 のをさるひが海軍の病ふはさん半に隔く陣敵は二所よりゆき  
 して身命と捨と打拂ひても通くは推をける小陣の敵が一族  
 初より謀及の張奉はといひつと久利を得て英法國をに通してや  
 扱仕ひ人をもん言及の二族もなれはうささしめて遠江の玉中城  
 陣と捕て作せ風雲ひつりい知合の事いりつこれ公敵ふうけ  
 ての退治せん幸也といふ百騎の勢中くと討ひてつて死やわさる  
 人の身とめく人馬たふはつれ矢の一番成もともくしと射及き力も  
 なく成て陣つらつてす成るひさきた後陣乃佐々本が陣は作と  
 近江の國へ引くささくさあねへう人をも城もたて築いて雲東  
 勢の上階しひんをもと所はひりつて中隊を越後守陣時もは備  
 となきれも佐々本とも今つらつる勢をなすんだのともく形  
 事をい進退さるるつて面々の意見とさひ中隊とあつてさ六何



さぬい堂小勝くたすして時信が待てくこ我と評定あつたわく六百餘  
騎此兵もみかほ堂の巻も我よりぬるは本利五時信より一里  
もより引退りて三百餘騎打たせりつゝおふ天魔波旬の志いさあつた有  
先六波羅殿と着馬の陣とて罪伏せよ取られく一人も逃れ付れ  
治ひたりとや告ぐるなる時信今いも危死中う影うらな中とあち川  
より引退りし陣も成く系法へ登小なり越後守仲時より一と時信  
と違しと待たひなるが満期と死く時とあなれは信と時信もや  
欲ふるにたると今とあち川引退りし中とあち川とあち川とあち川と  
小腹ときんむる物と中と一途不忠と定く言支帰くくせりて  
る其時軍勢たふむひて言ひなる武運中とやく傾きて南原の  
滅亡迫たふ有るしせ月あひるうう馬矢の名公さくし日頃のよりと  
と意違ひして是まで付中とひ後ふんさくし中と中と小言のりその  
報謝の思ひ深くせりて一家の運もたふせぬれば何とせりてと

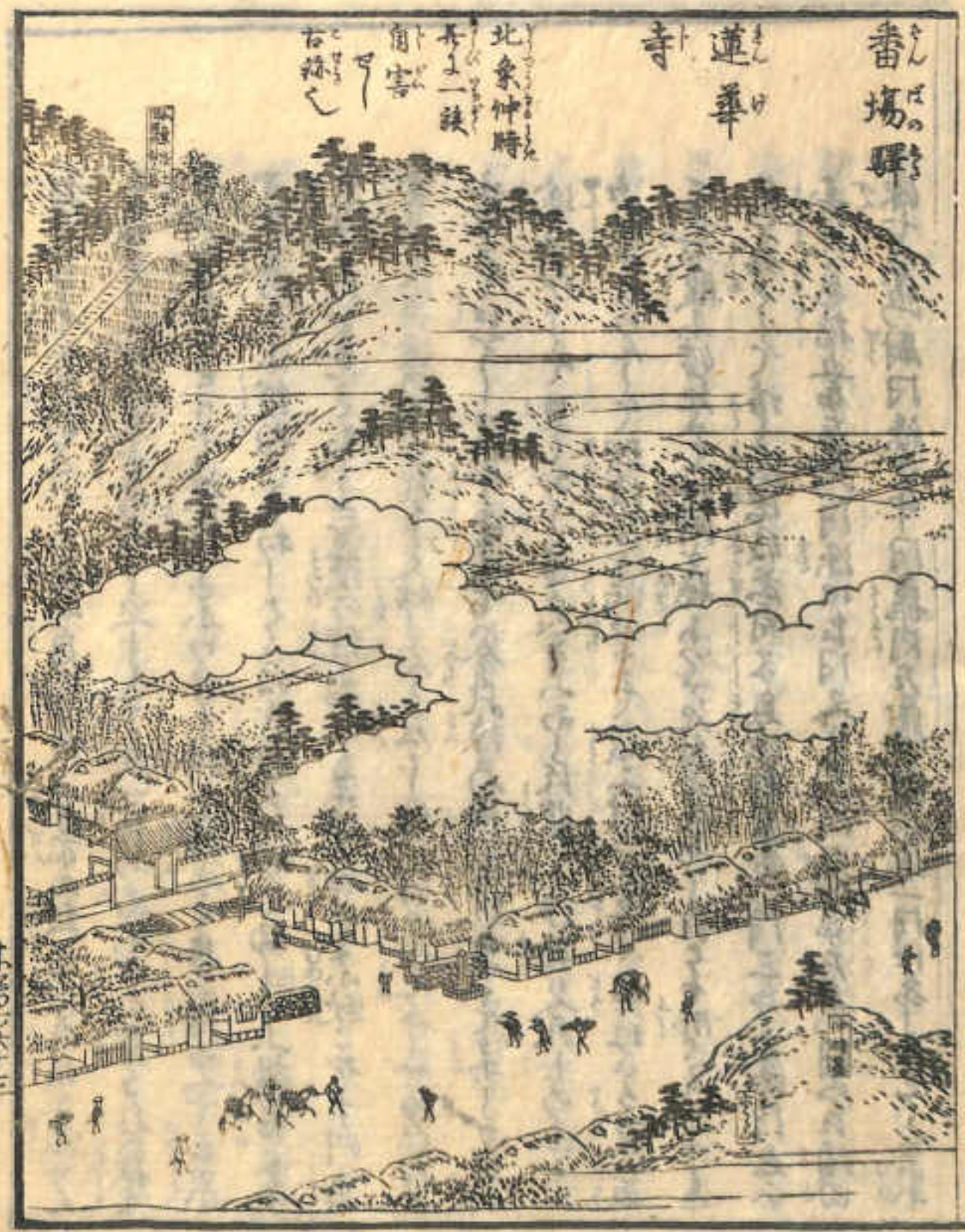
報まき今と我がくくのたふ自害しや生名の報事死後小報せん  
となるは仲時不肖なりとも平氏一統の名あふ身うれは整  
定く我首をさうて源氏のもふつて料を補く思小備之せと果  
さ所言の中小程ぬとておしととぬを腹うれ切く物ゆわ小精首と事  
宗秋これを見くもとと程の能小のをも所を押して宗秋をすの自  
害して冥途の所ををを休んとなし作ひはる不充とせりひなる  
幸こそはとつれ今生もてい今此際乃御お逢見さて来りせり真  
途るれとて見たりとちとさふ小あは成く汚物死出のいさ  
治中よりんて越後守が柄の中と腹小はとさくをたる刀と取  
て已と腹小はたそ仲時を勝小つ死付らつてれとて時とあち  
是と始りて信と本原は花岡子息次郎左衛門月三郎清満月をい  
妻九喜格五郎左衛門月三郎良月又三郎月三郎清満月をい  
源七喜格五郎左衛門月三郎良月又三郎月三郎清満月をい



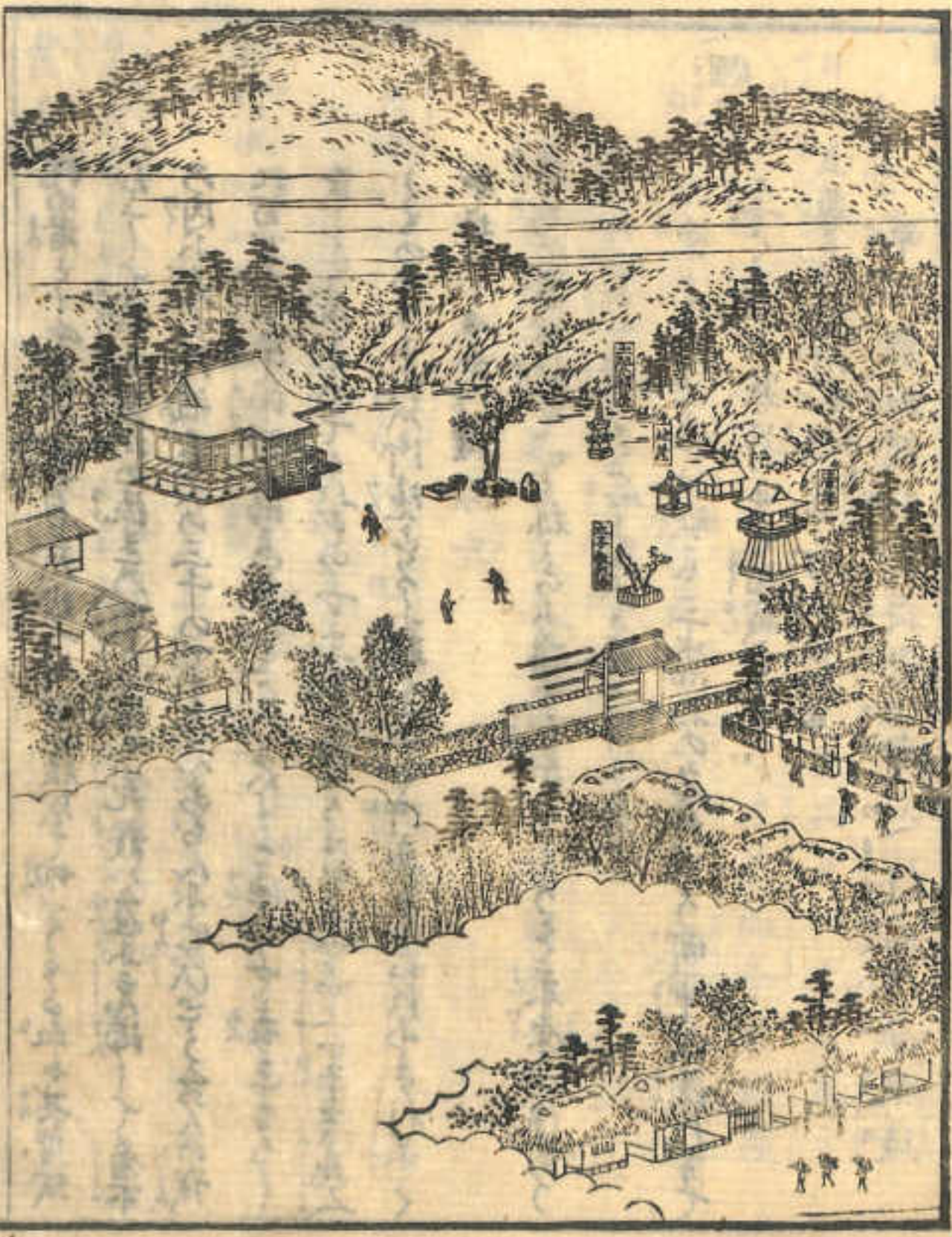
番場驛

蓮華寺

北条仲時  
其上一訣  
自害  
古跡之



本考一六十七





洗の者として都合百三拾式人日射小腹成て切つるなる血を其身に  
かこて恰も美川の流るるごとくなり死骸の産み充滿して着衣  
の肉小異に彼をその二千のてしえんあらん小亡びさるる人の我  
に百万の士卒の如く隔是る人もこれをもとせしむるを表すなり  
幸とも月もあてられむらふ言もあつらふる主上上皇を以て死ん  
どものあつらふ御流流とらふ肝も如く御身もその如く果て  
せおつらふらふ下果

醒井

番馬の着然りてか糸とらふ所小あつらふるも本原の道あり  
榎村石おと通うる名小あつらふる井小着く  
柏原まで一里半は駄小三水四石の名所あり所中小流れあり  
至く清く寒暑中を清減なり  
日本武尊居寤清泉 所の中程民家の敷  
古事記云 草那藝劔置其美夜受比賣之許而取伊服岐

本考一六十八

能山之神幸行。於是詔。茲山神者。徒手直取而  
騰其山之時。白猪逢于山邊。其大如牛。爾為言  
舉而詔。是化白猪者。其神之使者。雖今不殺。還  
時將殺。而騰坐於是。零大水雨。打惑倭建命。此  
白猪者。非其神之使者。當其故。還下坐之。到玉  
倉部之清泉。以息坐之時。御心稍寤。故号其清  
泉。謂居寤清泉也。

十王水

當取所は捨爪ありしり一侍流貴所う小あつらふ  
備後一はしりり令石地極水よあり

西行水

水よきて乾くこと水急の名小その流泉川乃白石  
西河氏苑の裏小あり岩間う流泉涌如ん  
池子の里繞あとも懐いと幸らんをあつらふ

日本武尊腰懸石  
瓮石

日本武尊腰懸石 居無水の傍小ありこれ小御腰をけり  
瓮石 結をけりて休息のしりり

本稿



蟹石 東の山間浦にあり

明神 影向石 賀茂明神社の作

は里へ天降るらん神のまゝのまねたむる石 叶集

賀茂明神社 神の止のふみ

地藏堂 石の中より腰の石の御不安

紫石燈籠 地蔵堂の傍にあり

さるる人の皇十二代の帝景行天皇才二の皇子初の所名い小准命其  
曾建の兄弟兩人と成り給ふに倭建尊と名を賜ふに其れを東  
夷を安く平らげ所凱陣の所伊弉山の懸懸毒寺以吹敷くは所是  
たすくくの清泉して清い給ふに忽平愈満しくなり給て名所古  
まゝの九年歴二千八百餘年小及りも亦奇く水と古今愛く  
とるもその名水とまゝ清く流るる美濃國書老の流石は流さず  
と給ふに清い清水の流るる葉石ありて小葉石入主碑并銘とく

名所公も小夏と心を素話と冷して旅あふ物んみかば清泉の流る  
かえりてとせとれり

川とあるを兼せて清く流るるありて物碑乃水 西相

水と清き流れの碑并ふに世乃流るるなり 西乃

解井の本流乃流るるなりとて志けり流るる縁今と見 長明

橋中も流るるありて初書とせり言乃流 秋岡法作

流るる縁今と見とて流るるなりとて流るるなりと見 宗孝親王

きのふ流るる名流りひ流の流るるなりとて流るるなりと見 今出川

夏の日流るる流るるなりとて流るるなりとて流るるなりと見 垂良公

十七日の夜流るる流るるなりとて流るるなりとて流るるなりと見 由勝局

流るる流るる流るるなりとて流るるなりとて流るるなりと見 小

音乃流るる流るる流るるなりとて流るるなりとて流るるなりと見 小

たつやせりよとて流るるなりとて流るるなりとて流るるなりと見

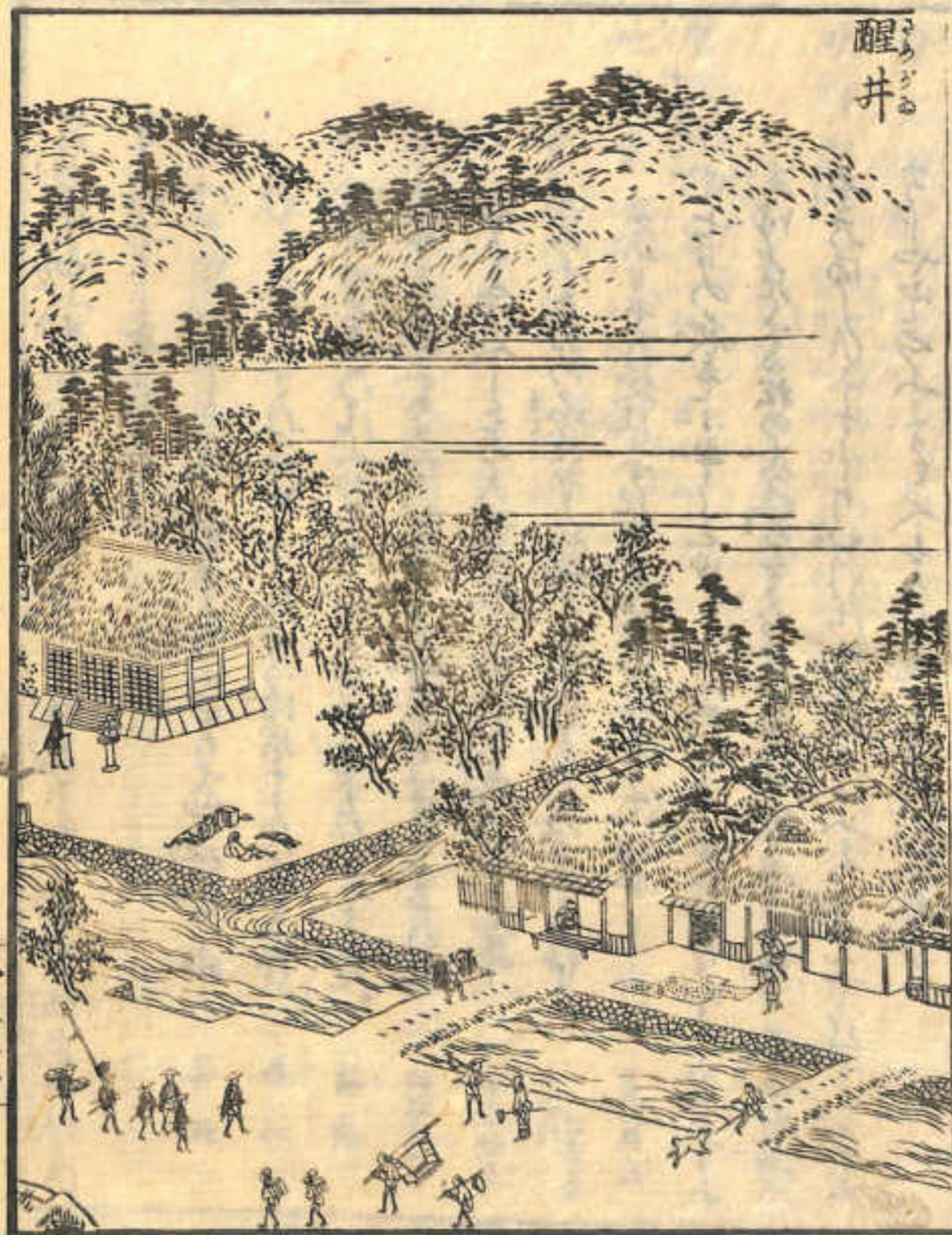


此所也  
三石四石の  
名蹟あり

日本武尊  
居寤清水  
腰懸石



醒井



本巻ノ七十



まのり

ひすまはにふらふらとすけのぼせろと書はらる井の水  
春ふ笑一醒弁を見ればけうた本の秋光相より海道の  
清みあふとさしき中ですらうてささふもいひ  
附勢のまじけきしら程るまは性運の林人よりてすまあふ東祖  
媿婦の園雲の扇姑風ふあて志とくく口も神のまは末ととれ  
道るれもたちこもむ事物くそて文よのれを彼西り  
扇を色も清くみ形くも極け志とくそてまをたちくあつれと  
よめまれまのりの中り

この乃本陰は清水にすすてさつてもまは諸全を免 元り  
醒弁乃清水見廻るく一色むる安作川あ形ここと幾帳もつれ  
あんと村を道ぬらる人梓山あけさのねとく形くそてあ曹丹集に  
梓山愛波此中ささく海まうるれは愛波園之契沖の士様編ま  
け款とせられう長沢村をささく書る原よ刺と相原の者小者く

相原

伊吹山

今頃中の一里は駄と伊吹山の麓ありて  
名産ありて伊吹艾の店多し  
坂田郡東にあり七高山の其一なり道は長修不  
伊吹山は建定六月の中な崩し登り山下に定連あり山  
野小八石を登ると小洞と繋ぐ霊陽其中小ありとて人婦川  
瀬川は山中あり隔る 伊福貴 五十音 晴吹 其吹  
伊布貴 魚布伎 伊大伎

後拾遺

冬あつく雪の成木多ありてありふたの外山も厚なり

新本

ひくもたまえあひやまもも茶のりも志しれあるあひと

新本

冬とまのりふたの書に生るくも絶たぬる有之を

新本

はれもささあけ伊吹の山乃とれももあぬさひくあり

新本

さうも茶のりも勝るは五月ぬ木伊吹の森は程も人

長尾謙信殿 尾寺あり





